

視覚特別支援学校（盲学校）におけるキャリア教育 および就労支援の現状と課題

The present state of job search assistance and career education
in special needs schools for the blind and the challenges involved

韓 星 民

SungMin HAN
福岡教育大学

波多野 千 歳

Chitose HATANO
福岡市立今津特別支援学校

(平成29年10月2日受理)

平成11年よりキャリア教育が提唱され、この理念は特別支援学校においても広がりを見せており、自立や社会参加に向けての指導や支援の在り方が検討されてきた。本研究では、全国の視覚障害特別支援学校（以下、盲学校）の教員を対象に、キャリア教育および就労支援の現状を明らかにすることを目的として、アンケートによる意識調査を実施した。調査の結果から、キャリア教育に関して①大変重要であると認識②望ましい開始時期は幼稚園や小学部低学年③重要視する能力は人間関係形成・社会形成能力④教育課程の中でキャリア教育の視点が反映されていると判断する教員は約60%⑤全体計画や年間計画を「十分活用」・「概ね活用」しているのは約40%⑥高等部普通科は他学部 비해、実践例や情報の不足、連携面、組織体制の整備など多くの課題を抱えていることがわかった。就労支援に関しては、視覚障害者の職種の広がりを感じられておらず、どんな「職業も可能である」とする回答は、危険でなければの条件つきで、約12%であった。今回の調査で、キャリア教育の体系化や長期的計画及び教師間、学部間、家庭、地域との連携が不十分であることが窺われた。キャリア教育の推進にあたっては、多方面と連携の下、小学部から高等部にわたる体系化された計画が必要であり、そのためには教育行政による実施可能なキャリア教育システムの構築が必要である。

キーワード：視覚特別支援学校（盲学校）、キャリア教育、就労支援、アンケート調査

I はじめに

情報技術の急速な革新は、産業や雇用の変化、若者自身の資質、子どもたちの生活や意識にも大きく影響を及ぼし、全人的でバランスのとれた発達を難しくしているという¹⁾。このような背景を踏まえ、学校教育に「生きる力」の育成が求められ、キャリア教育の推進がなされてきた。

平成23年中央教育審議会は「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）」で、キャリア教育を「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す

教育」と定義づけた²⁾。特別支援学校においても同じく、自立や社会参加に向けての指導や支援の在り方が検討されキャリア教育が導入された。

知的特別支援学校におけるキャリア教育の視点を取り入れた「作業学習」や「産業現場等実習」といった体験的な活動をはじめとする学習や活動の支援や指導の実践例は、数多く報告されている。

一方、盲学校においては、キャリア教育の理念や具体的な実践について研究がなされているものはごくわずかであり、キャリア教育の取り組みについては現在も模索されている。

盲学校に在籍する児童生徒に対して長尾(2015)が平成26年度に実施した、「なりたい職業」に関

する全国調査の結果では、小学部4年から中学部3年の視覚障害単一障害児（生）が将来なりたいとする職業は、「なし」と回答した者が16.5%と一位であった。また、小学部で3人に2人、中学生で3人に1人が、将来の自分像に無関心のままであった³⁾。

平成25年度障害者雇用実態調査では、障害種別の雇用率は「肢体不自由」43.0%、「内部障害」28.8%、「聴覚・言語障害」13.4%、「視覚障害」8.3%であった⁴⁾。

本研究では、就労している視覚障害者が少ないという状況の下、視覚特別支援学校の教員が、キャリア教育をどのように捉え取り組んでいるのか、就労支援と合わせアンケート調査を行い、現状を明らかにし、今後の取り組みについて検討した。

Ⅱ 方法

1. 調査対象

全国の盲学校66校のキャリア教育・就労支援の担当の教員を対象とした。

2. 調査手続き

調査は全国の盲学校に無記名自記式調査用紙を郵送した。回答は同封した返信用封筒で返送を依頼した。調査期間は平成28年9月1日から9月30日までとした。

3. 調査項目

今回実施したアンケート調査用紙は、プロフィールに関する質問5問（選択式）、キャリア教育に関する質問（選択式8問と自由記述1問）、就労に関する質問（選択式3問と自由記述1問）であった。アンケート調査の質問項目は、最終頁の表1に示す。

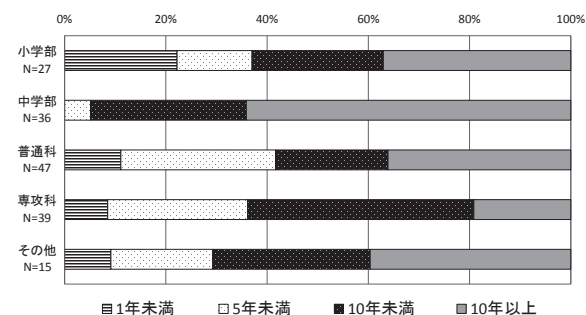


図1. 盲学校での勤務年数

4. 倫理的配慮

個人が特定されないように、所属分野は「小学部」「中学部」「高等部普通科（以下、普通科）」「高等部専攻科（以下、専攻科）」「その他」の分類とし、学校名は問わなかった。

5. 回収

郵送した全国66校のうち49校（74.2%）、164名からアンケート用紙を回収することができた。

6. 分析

分析は各所属学部で分類し集計した。複数回答可の質問については、有効回答者数を分母としてその回答者数の百分率を算出した。各項目における有効回答数は、図中にNで示した。

Ⅲ 調査集計結果

1. プロフィールに関する質問について

各学部の割合は、小学部16.5%、中学部21.9%、普通科28.7%、専攻科23.8%、その他9.1%であった。各学部における男性教諭の割合は小学部33.3%、中学部58.3%、普通科46.8%であり、専攻科は84.6%であった。

また、盲学校での勤務年数については、「10年以上」が小学部では37.0%、中学部では64.1%、普通科36.1%、専攻科19.1%であり、中学部の勤務年数の長い教員の割合は他の学部より多かった。（図1）。

キャリア担当経験年数では、10年以上の教師が、小学部は0.0%、中学部6.5%、普通科12.5%、専攻科20.0%であった。また、小学部では、キャリア担当経験年数が1年未満58.3%と経験年数の浅い教員が多かった。キャリア担当の経験年数の長い学部は専攻科で、4年以上経験のある割合は56.7%であった。（図2）。

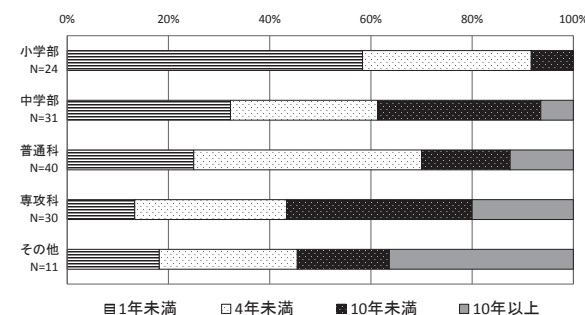


図2. キャリア教育担当経験年数

2. キャリア教育に関する質問について

(1) キャリア教育の重要性

キャリア教育の重要性については、「大変重要である」「重要である」と回答した割合が、小学部 96.2%，中学部 91.7%，普通科 95.7%，専攻科 97.4% であり，盲学校におけるキャリア教育の重要性は高く認められていると言える（図 3）。

(2) キャリア教育の開始時期

キャリア教育を開始する時期については，幼稚園からとする割合が小学部 59.3%，中学部 32.4%，普通科 29.8%，専攻科 23.1% であった。また，「小学部低学年」開始より「幼稚園」からの開始と回答する割合は，普通科を除く他の学部で高かった。より早い段階からキャリア教育を開始する必要があることが示唆された（図 4）。

(3) キャリア教育に関して重視している指導内容

重視している指導内容としては，小学部は「基本的生活習慣の定着」が最も高く 88.9% で，次に「児童生徒の主体性，積極性」「人間関係形成・社会形成能力」がともに 81.5% であった。中学

部，普通科，専攻科は「人間関係形成・社会形成能力」が最も多く，いずれも 70% を超えていた。次に「自己理解・自己管理能力」と続き 50% を超えていた。各学部で重視している指導内容に違いがみられた。

一方，汎用的能力の一つである「キャリアプランニング能力」は小学部 3.7%，中学部 25.0%，普通科 28.3%，専攻科 25.6% と各学部すべてにおいて最も少なかった（図 5）。

「キャリアプランニング能力」は，「学ぶこと・働くことの意義や役割の理解」や「将来設計」などに関わる力であるが，この項目が最も少なかった理由としては，「キャリアプランニング能力」の指す具体的な方法が確立できていないと考察する。

(4) キャリア教育の充実に向けて重視している教育課程

教育課程との関連においては，小学部が「自立活動」88.5%，中学部は「総合的な学習の時間」82.4%，普通科は「自立活動」84.8%，専攻科は「理療科」が 75.7% と最も重視されていた。道徳

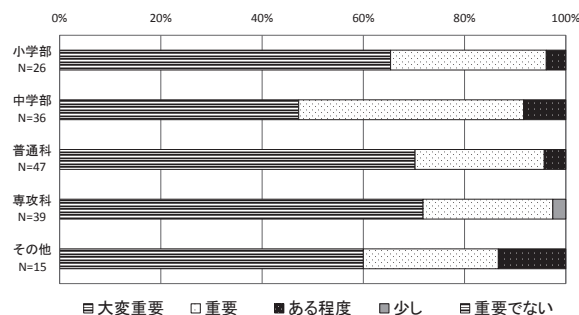


図 3. キャリア教育の重要性

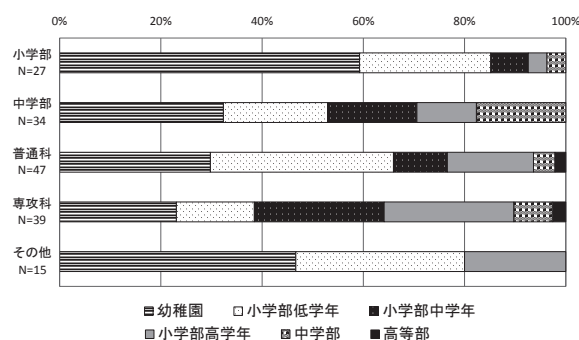


図 4. キャリア教育の開始時期

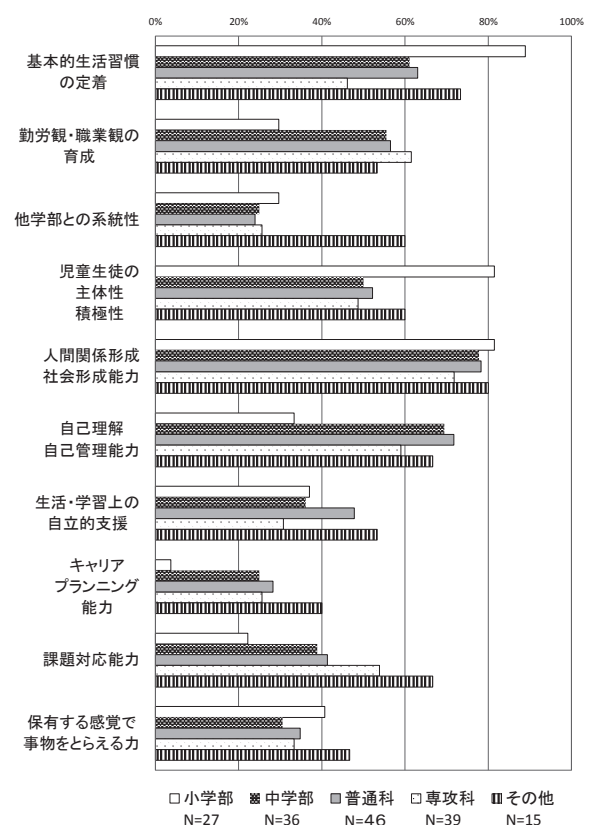


図 5. キャリア教育に関して重視している指導内容

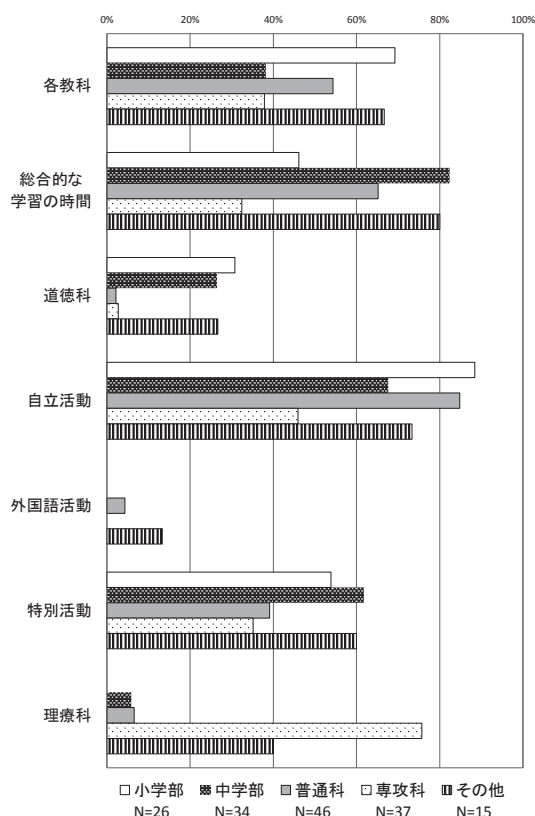


図6. キャリア教育の充実に向けて重視している教育課程

科、外国語活動は、他の教育活動と比べて低かった。「自立活動」は専攻科を除く他の学部では、いずれも60%を超えていたが、これは指導内容とキャリア教育の内容が近接しているためだろう(図6)。

(5) 「働くこと」や「自己の生き方」について考える力を育てる活動

「働くこと」や「自己の生き方」などにつながる意欲や態度を育てるための具体的な活動としては、小学部では、身近な「係活動」が87.5%と一番高かった。「職場体験」は中学部91.4%、普通科97.6%、専攻科91.7%であった。「働くこと」に直接つながる活動のためと考察する。中学部、普通科では「職場体験」の次に、「係活動」「社会科見学」「学校行事」などが続いている(図7)。その理由としては、目標に向けて自分の役割や他者と協力、協働の経験をしやすいからだろう。その他の活動としては、交流及び共同学習や卒業生による進路講演会などが挙げられており、これらの活動は生徒数の少ない盲学校に通う児童生徒にとっ

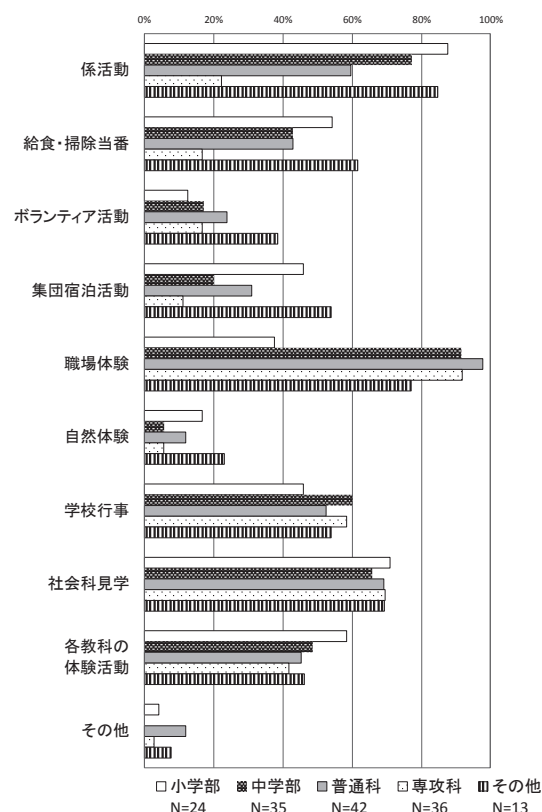


図7. 「働くこと」や「自己の生き方」について考える力を育てる活動

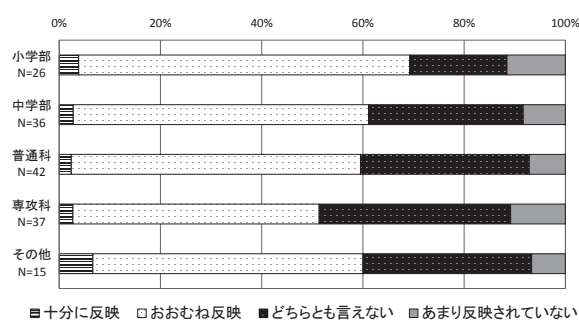


図8. キャリア教育の視点の反映度

て大きな刺激となり、他者を意識したり、自分自身を見つめ直したりする機会になり得ると考える。

(6) キャリア教育の視点の反映度

教育課程での位置づけについて、「十分に反映されている」「おおむね反映されている」とする回答は小学部69.2%、中学部61.1%、普通科59.5%、専攻科51.4%であった(図8)。

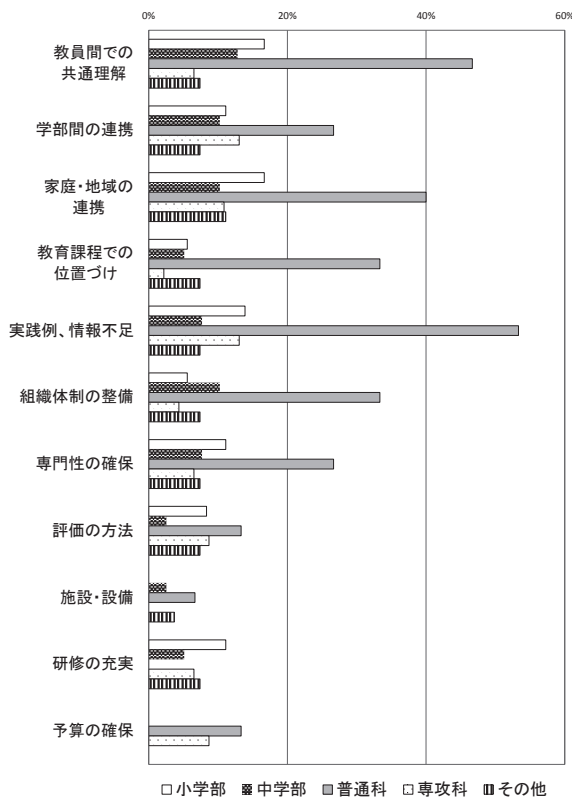


図 9. キャリア教育の課題と難しさ

(7) キャリア教育の課題と難しさ

キャリア教育の課題と難しさについては、普通科は、「実践例、情報不足」53.3%、「教員間での共通理解」46.7%、「家庭・地域との連携」(40.0%)、「教育課程の中での位置づけ」33.3%「組織体制の整備」33.3%と多くの課題を挙げた。他の所属学部と比較していずれも割合は高かった。

他の学部では、「教員間での共通理解」「家庭・地域との連携」などが課題として挙げられていた(図 9)。

普通科で、問題視する課題が多かったのは、進学、就職と社会へ出ていく最終的教育段階で、キャリア教育の課題と難しさが浮き彫りにされたと考察する。

(8) 全体計画や年間指導計画の活用

全体計画や年間指導計画の活用については、「十分に活用できている」「おおむね活用できている」は小学部 25.9%、中学部 41.7%、普通科 48.9%、専攻科 39.5%であった。「どちらとも

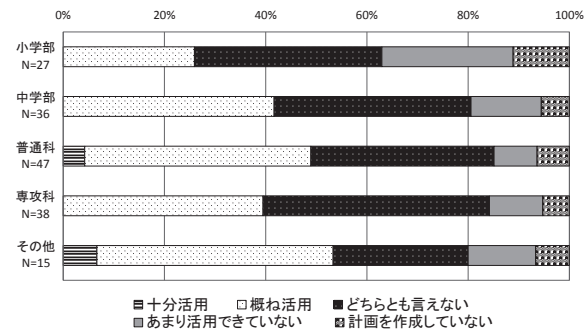


図 10. 全体計画や年間指導計画の活用

言えない」は小学部 37.0%、中学部 38.9%、普通科 36.2%、専攻科 44.7%であった(図 10)。

学部が上がるにつれて、活用の度合いが上がっていることがわかった。「どちらとも言えない」の回答が多かった理由としては、「全体計画や年間指導計画を作成しているかどうか分からない」といったことや「全体計画や年間指導計画の内容がそれぞれの教育活動の中にどう位置づけられているのか分からない」ということが考察される。

(9) 児童生徒に身につけて欲しい能力や態度（自由記述）

自由記述形式「今後、キャリア教育を通して、どのような能力や態度を児童生徒に身につけてほしいと考えていますか?」の問いにアンケート回答者 164 人中 155 人から回答が得られた。どの学部においても多くみられた回答が、「コミュニケーション能力」であった。キャリア教育で重視していること、就労していく上で必要な力についての質問でも同様にコミュニケーション能力が挙げられていた。このコミュニケーション能力には支援依頼が自分発信できる意味も含まれている。次いで、自己理解、自己解決能が多くみられた。盲学校という護られた、外部との接触の少ない環境から出立した時を考慮してのことだろう。技術的能力よりも障害を含めた自己理解や自己解決能力といった、外の社会で生きていく力を重視していると思われた。

学部別でみると、小学部は「コミュニケーション能力」の他に、挨拶や自分のことは自分で決めるといった「基本的生活習慣」、中学部以降は「障害を含めた自己理解」、高等部では、自立へ向けた姿勢に関するものや就労に関した「情報収集能力」、「課題遂行力」等が新たに加わっていた。

以下、自由記述内容

小学部

- ・日常生活動作や移動など自分でできることは、自分ですることが、どの仕事に就くにしても最低限必要。
- ・自分の生活を自分でつくっていく態度、意欲を育てたい。
- ・コミュニケーション能力。
- ・それぞれの発達段階に応じた社会人、職業人として自立するための能力。
- ・特にコミュニケーション能力の向上、自己理解に努め障害を受容して自らを伸ばしていく力。
- ・発信する力。
- ・基盤形成期の小学部児童には、基本的生活習慣、基礎学力の定着を図った上で、勤労を重んじ、目標に向かって努力する態度を身につけて欲しい。
- ・言葉遣い、挨拶、報告、などが適切にできる力。
- ・人間関係形成能力、特にコミュニケーション能力です。盲学校は児童数の減少により、集団の中でコミュニケーションを図る機会が難しく少なくなっています。交流などを通して、身につけてほしい能力の一つです。それから意思決定能力です。他者からの指示によるものでなく自ら判断し、自らの考えを表現できる力を身につけてほしいです。
- ・最低限、基本的生活習慣は身につけてほしいと考える。
- ・自分のできることを増やすとともに、自らの得意なこと、苦手なことがわかり、積極的に実体験を重ねて社会生活への概念を高める。将来の「働く」ということに夢や希望をもつ。
- ・自己管理能力や人間関係能力を特に身につけて欲しいと考えます。
- ・自ら外界に働きかける力。
- ・周囲と調和しながら自立する力、コミュニケーション能力（特に、自分から援助依頼ができること）。
- ・人間関係形成能力。
- ・興味関心が高く、周囲の様々な情報を取り込み、取捨選択しながら、生かしていく力。学んだこと、経験したことを総合的に結び付けながら、課題に向き合い解決する力。
- ・より良く生活するために、工夫していく力。
- ・周りの人とコミュニケーションをとり、自分の役割を果たす力。
- ・視覚障害があっても工夫して課題を遂行してい

く力、できない時に周囲に援助を求める力、周囲の人々から愛される人間性を身につけてほしい。

- ・自己理解（自分は何が得意で何が好きか、自分がわかるための手立てがわかっているか、できないところも理解して援助依頼もできるか）。
- ・人間関係形成能力（職場や周囲の方とのコミュニケーション能力）。
- ・情報活用能力（時間感覚、自力移動、自分に必要な情報を取り入れる）。
- ・意思決定能力（意思表示、自己選択、自己決定能力）。
- ・視覚障害においては、環境の理解、主体性、自分を取りまく環境のなかでの人間関係など自分から人や物事にに関わり、多くのことを吸収しようとする態度。

中学部

- ・多様な職業や進路選択があることを知り、その上で自分は何に興味・関心があり、何をやりたいのか、そのために今どのようなことに取り組まなければいけないのかを考える力、実践する力を身につけてほしい。
- ・どのような仕事につきたいのかだけでなく、どのような人生を送りたいのか、生きがい、趣味を含めたキャリアプランニング能力の育成。
- ・自分で考え、正しい判断をし、その判断に基づいて行動する力。年齢や発達段階に応じた必要な内容を徐々に身につけてほしい。
- ・基本的生活習慣、協調性、対話力。
- ・コミュニケーション能力、社会の事象に関心をもつ態度、自己の能力や適性を正確に把握できる能力。
- ・社会や職場におけるルールやマナー、自己理解。
- ・社会の要請（らしさといったそのもののもつタスク）に応えていく力。
- ・自己理解を深め、一人でできること、できないこと、できないことはどの程度支援してもらうか、どんな道具があれば、一人でもできるのかを把握して欲しい。
- ・人間関係形成能力、自己選択、自己決定する力、自己理解を深め、自ら進んで課題に取り組んでいく力などを身につけて欲しい。
- ・自己理解を深めながら職業観を育成し、様々な情報の中から自分に役立つ情報を選択し、職業選択にもつなげられるようにすること。
- ・社会生活の中での人とのかかわり方、自分自身

がどのように社会貢献していけるかなどを学んで欲しい。

- ・働くこと・生きることへの意欲や前向きな態度。
- ・自立意識や目的意識を培い、社会人・職業人として必要な基礎的・基本的な資質や能力を身につけてほしい。
- ・人間関係を上手く築くためのコミュニケーション能力。自分の夢や希望を持ち、それに向かって努力する態度と実現するためのプランニング能力。
- ・課題対応能力。
- ・知的障害を伴っていることがあるので、一概に言えない。基本的には1人の社会人として、生きていく力を身につける。
- ・主体的にやろうとする意欲とそのためのコミュニケーション能力の高まり、自己理解とレジリエンスの高まり、そういった能力を高めていきたい。
- ・社会の中でたくましく生きていく力、豊かな生活を送っていくための余暇活動など。
- ・個々の課題は家庭との連携の充実を図ることで積み重ねができることも多い。しかし、社会性を身につけることや、校内と一貫した指導や社会との連携が必要。本校中学部の生徒には、是非社会性、人間関係形成能力を身につけて欲しい。
- ・障害認識、自己理解を深め、社会に適応する力、社会の変化や状況に対応していける力、主体的に行動する力、まわりの人に相談したり疑問点を尋ねたりする力。
- ・自分のことは、自分ですするという態度、自ら周囲の人へ関わっていかうとする態度。
- ・自分のことは自分で考え、行動し、解決できる能力。
- ・勤労の尊さや創造することの喜びを体得し、職場体験などの職業や進路にかかわる啓発的な体験を得ると共に、将来的な就労に必要な資質や能力について意識し、普段の学習や、学校生活でもその体験を活かすことを目的と考える。
- ・人との繋がりを積極的に作ること、自分の役割を考えること、適切な援助依頼手段を学習し、実践できること。
- ・コミュニケーション、意思疎通、問題解決、将来設計、自己決定。
- ・人間関係を形成する能力（コミュニケーション・協力）情報を活用する能力、将来について計画する力（生活習慣の形成、少ない支援で自

分でできることをふやす）。

- ・挨拶を基礎としたコミュニケーション能力。

普通科

- ・卒業後に社会人として自立し、職業人として貢献できる力、自分の障害に対し、合理的な配慮を求める力。
- ・人とコミュニケーションを自ら積極的にとろうとする態度、我慢強く粘り強く物事に取り組む姿勢。
- ・自尊感情、他者理解。
- ・自己理解、自己肯定感、コミュニケーション能力。
- ・やりたいことを実現していく強い意志と行動力。
- ・集団の中での自分の役割に対する責任感、自己理解、また他者の価値観を尊重する態度。
- ・就労に対する具体的な目標、将来に対する見通し（10年後、20年後）。
- ・頼る保護者が亡くなっても、たくましく生きていく力、自立していける力を身につけていって欲しい。
- ・自分の力で生きていける力、自分の障害をきちんと理解した上で、他の人に支援してもらいたい事柄や方法をしっかりと伝えられる力が必要だと思います。
- ・自分で生きていく力を身につけてほしい。
- ・自己の障害について正しく理解し、前向きに取り組む姿勢を身につけてほしい。
- ・基本的生活習慣の定着、人間関係形成コミュニケーション能力の育成。
- ・自己理解とあわせ、望ましい対人関係の構築（卒業後の生活に向けて）。
- ・継続して取り組む力を養う、やり遂げる達成感を味わう、体験する。
- ・働く意味ややりがいを感じる事ができる。
- ・コミュニケーション能力。
- ・自己実現できるように基本的生活習慣を身につけ自分でできることを増やしてほしい。
- ・自ら考え行動する力を身につけ、仲間とコミュニケーションをとりながら仕事できるようになって欲しい。
- ・自己理解を深めることによって自分でできること、援助を受けること等を精査し、自立した生活（あくまでできることを多くするという意味での自立）を目指せるようにして欲しい。
- ・情報収集能力、発信力。
- ・自分で考え、決定、実行する力。

- ・思考力, 判断力, 表現力, 学びに向かう力, 社会的自立。
- ・自分でできることは自分で行う。
- ・自己開示, コミュニケーション能力, 自主性, 適切な自己理解とコミュニケーション力。
- ・自らの得意不得意や長所を知って能動的に自己実現を図る力。
- ・重複生徒は進路先が入所, または生活介護事業所に限られてしまうので, 1人でできることを増やしていきたい。
- ・障害を含めて自己理解を深め, 主体的に学ぼうとする意欲, 行動力, 人とともに生きるために必要なコミュニケーション力。
- ・将来, 自立していくために必要な力を身につけてほしい。コミュニケーション力, 対人関係, 情報活用能力, 移動能力, 行動力, 課題解決力。
- ・自分で情報を集め, 自分で考え判断し, 行動できる力。
- ・自立のための能力, 態度。
- ・自己理解, 課題解決能力。
- ・社会に出たときの自立。
- ・自分から発信していく力, 自ら学びたいと思うような力。
- ・コミュニケーション能力, 社会性, 日常生活技能, 粘り強く前向きに努力する態度。

専攻科

- ・自身の能力を正確に評価し, 実現可能性のある就労職種の選定とこれに向けて獲得すべき能力を把握できる力。
- ・課題解決能力, 人間関係の形成, 現実の理解(就職状況等)自己理解, 自己管理能力, 社会形成, 人間関係形成能力。
- ・できることとできないことを伝え, 「どうするとできるか」を伝えることができるようになってほしい。
- ・コミュニケーション能力の向上, 自己管理能力, 自分で考え, 行動していく力, 社会の中で楽しく幸福に暮らしていくための力。
- ・他者の考えを聞く態度。
- ・コミュニケーション能力。
- ・自分自身のことだけではなく, 視覚障害者全体の事を考えられるようになってほしい。視覚障害者の生活や就労など発展させていくためにどのように考え, どのように実行するのかなど。
- ・生徒の実態によって異なるものであるため, 長所をのばす指導を心がけている。

- ・自己の適性を理解し, 適切な進路選択ができるようになって欲しい。
- ・視覚障害をもちながらも障害を受容し, できるスキルを増やし, 必要な援助を依頼しながらたくましく生きていく力。
- ・生きる力, 楽しむ力。
- ・社会生活のマナー。
- ・どのような状況におかれても, 課題を克服する「生きる力」, コミュニケーション能力。
- ・生徒の自己理解・自己管理能力。
- ・良き社会人(職業自立者として, 社会参加者)としての能力と態度, 良き生活者としての能力と態度を形成させたい。
- ・コミュニケーション能力, 問題の発見と解決する能力。
- ・会社に依存するのではなく, 会社の中でも自立して働くことができ, かつ協調性があること。
- ・課題に対し, 自己で探求し, 克服していく能力。
- ・四領域すべてにおいてバランスよく身につけてほしい。
- ・働く意欲。
- ・進路先などでの実習, 面接などにおける一般常識やビジネスマナー(態度, 言葉使いなど)を身につける必要がある。
- ・良好なコミュニケーション能力。
- ・働くことの意味, マナー挨拶。
- ・問題解決能力, 自己肯定感。
- ・児童生徒の主体性, 社会性, 自己理解。
- ・自己理解と外界への働きかけ(コミュニケーション)。

3. 就労に関する質問について

(1) 視覚障害者の職種の広がり

視覚障害者の職種の広がりについては, 「おおいに広がっている」とする回答は無かった。「ある程度広がっている」とする回答は, 小学部 12.5%, 中学部 8.8%, 普通科 17.8%, 専攻科 13.2% であった。

小・中学部, 普通科においても最も多かった回答は「どちらとも言えない」であった(図11)。

この「どちらとも言えない」の理由として, 職種の広がりについて全く広がっていないとは思わないが, 手応えとして広がっていると感じにくい, あるいは, 小学部や中学部では, 職業や就労状況に関する情報が少なく, 広がりに対して実感が少ないためと考察される。

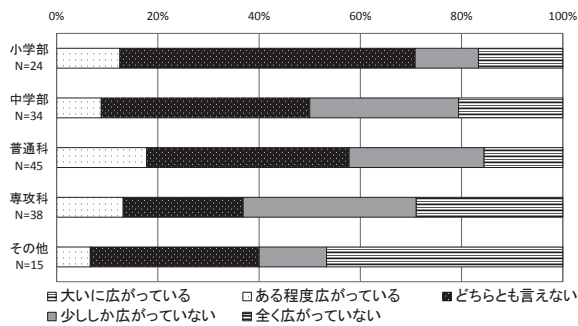


図 11. 視覚障害者の職種の広がり

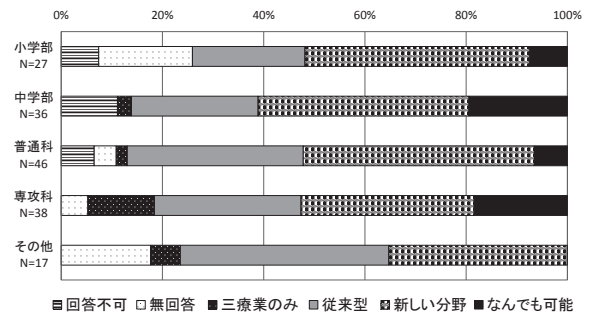


図 12. 視覚障害者が就労できる職業は？

(2) 視覚障害者が就労できる職業は？（自由記述）

「視覚障害者の職業としてどのような職業があると考えますか？」の問いについて、最も多く挙げられたのは、全体では、やはり「三療業 (69.8%)」であった。次いで、「教員 (37.0%)」, 「パソコンを使った事務」(28.4%), 「音楽関係 (18.5%)」「情報処理技術者」16.0%「電話交換手」13.6%「なんでもできる」11.6%, 「弁護士」11.1%「公務員」10.5%の順となっていた（重複回答あり, 「なんでもできる」と答えた数は「なんでもできる」以外の職業には含まない）。弁護士や、音楽家が挙げられる背景としてメディアに取り上げられた弁護士やピアニストの活躍があると考察する。電話交換手は視覚障害者の就労の場としては歴史があり、減少傾向ではあるが、求人もあるため名前が挙がったと考えられる。

次に、理由を挙げて回答できないとしていたものを「回答不可」、何も記入されていないものを「無回答」、三療業のみの回答は「三療業のみ」、三療業、パソコンを使った事務、公務員、教師、電話交換手といった、現在、視覚障害者の就業率上位を占めるものだけを挙げていた回答を「従来型」、その他の新しい分野を挙げていた回答を「新しい分野」、なんでも可能とする回答を「なんでも可能」として分類し、学部毎に調べた。「無回答」は小学部で 18.5% 見られた。「三療業のみ」とするのは、小学部は 0.0%, 中学部 2.8%, 普通科 2.2%, 専攻科 13.2% であった。「従来型」は小学部 22.2%, 中学部 25.0%, 普通科 34.8%, 専攻科 28.9% を占めていた。就業先として定着しつつある職種は就職可能な職種としてイメージされやすいと思われる。次に、危険なこと以外は「なんでも可能」とする回答は小学部 7.4%, 中学部 19.4%, 普通科 6.5%, 専攻科 18.4% であった（図

12)。

回答不可とする理由の答えとして、「視覚障害と聞いただけで、常時支援者を一人つけなければ危険といった誤った認識がいまだに多く、敬遠されてしまう傾向が強い。」という現状を踏まえての意見や、重複障害や視力の程度によって異なり、すべてにあてはまる職業は答えられないとするものがあつた。

「無回答」は「回答不可」の理由の他に視覚障害者の就職に関する情報不足も考えられる。

「新しい分野」で分類した職業では、ナレーター、嘶家といった声を手段とする職業や、カウンセラー、生活相談員などの心理系の仕事挙げられていた。全部で 67 の職業が挙げられていた。

「新しい分野」であげられた職業は、視覚に障害があつても、業務に支障の少ないものに限られており、「なんでも可能」の回答も、危険が伴わないという条件つきであった。

(3) 就労していく上で身につけておく必要がある力

就労していく上で身につけておく必要な力については、どの学部においても「コミュニケーション能力」が高く、小学部 37.0%, 中学部 25.0%, 普通科 32.6%, 専攻科 25.6% であった。次に高かったのは、小学部は「課題解決能力」33.3%, 中学部は「パソコンスキル」「情報活用能力」が共に 19.4%, 普通科が「移動能力」24.0%, 専攻科も「移動能力」26.0% であった（図 13）。

(4) 職業生活における課題や困難さ

職業生活に考えられる課題や困難さとしては一番多く回答のあつたものは、小学部は「障害に対する周囲の理解」40.0%, 中学部は「障害に対す

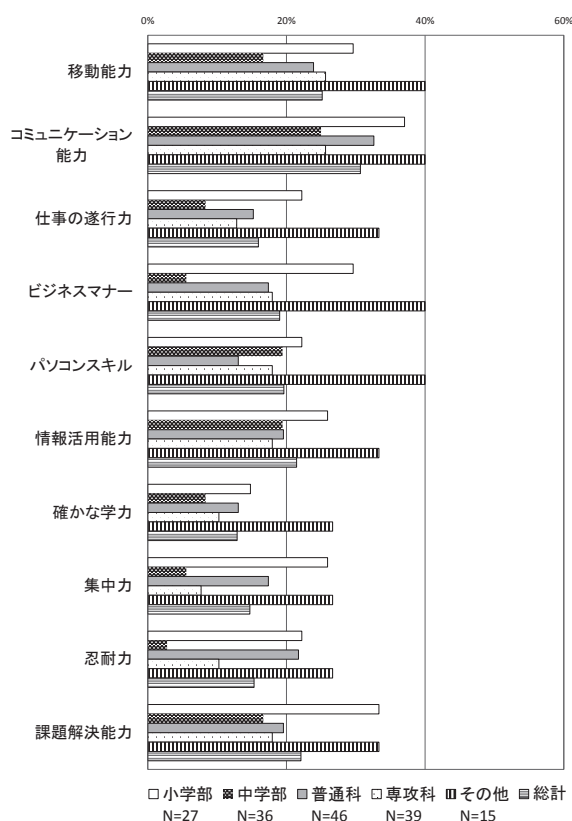


図 13. 就労していく上で身につけておく必要がある力

る「周囲の理解」と「安全な環境設備」が22.9%、普通科は「移動」,「障害に対する周囲の理解」,「職場での人間関係」が23.4%, 専攻科は「移動」が25.6%であった(図 14)。

職業生活における課題や困難さとしては「周囲の理解」が多かったが、周囲の理解を得るためには、視覚障害児生徒が自らの考えや支援を求めていることを上手く伝えるといったことを含めた前述の「コミュニケーション能力」が必要となってくるだろう。「その他」の回答において、「本人の意識」や「自らの発信力」,「仕事そのものに対する認識の甘さ、高い依存心等」などに特別支援学校ならではの課題や困難さが見受けられた。

Ⅳ 考察及び論議

1. キャリア教育に関して

キャリア教育に関する調査結果より以下のように整理する。

- ・キャリア教育は大変重要であり、早い時期(幼稚園)からはじめることが望ましい。
- ・各学部で重視している指導内容は、小学部は

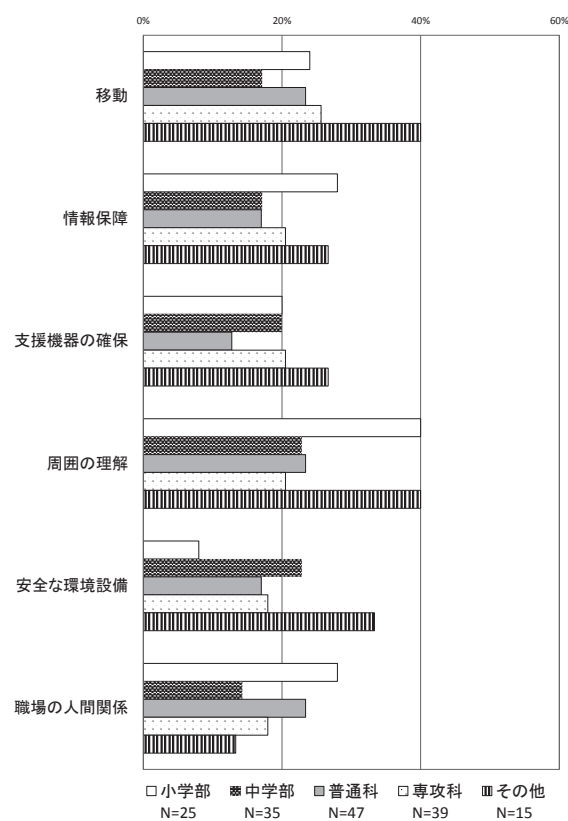


図 14. 職業生活における課題や困難さ

「基本的生活習慣の定着」, 中学部, 普通科, 専攻科は, 「人間関係形成・社会形成能力」であった。

- ・教育活動の充実のために、最も重視している教育課程は学部で異なるが、専攻科を除く学部は「自立活動」を60%超える教師が重視していた。
- ・「働くこと」や「自己の生き方」などについて考えていくことができるような活動として、小学部は「係活動」, その他の学部は「職場体験」に重きをおいていた。
- ・キャリア教育の視点が教育課程に「十分に反映されている」「おおむね反映されている」とする割合はどの学部とも約6割であった。
- ・キャリア教育を実践していく上での、課題や難しさは、普通科が「実践例、情報不足」「教員間での共通理解」「家庭・地域との連携」「教育課程の中での位置づけ」「組織体制の整備」で全般にわたり問題を抱えていた。
- ・キャリア教育の全体計画や年間指導計画の活用については、「十分に活用できている」「おおむね活用できている」は50%未満であった。

本調査から現場ではキャリア教育に関する必要性は十分認識しているものの視覚障害児童生徒にどのようなキャリア教育を行うべきか模索しているケースが多く見受けられた。

また、普通科だけが、多くの課題を問題視している状況から、小学部、中学部では、自立、社会参加はまだ先のことと捉えられている可能性が窺える。普通科が課題として取り上げている諸問題は、小学部から高等部まで共通の課題として取り上げる必要があり、体系化された計画のもとにキャリア教育が進められるべきであろう。

キャリアに関して重視している内容は「人間関係形成・社会形成能力」であったが、同じくキャリア教育の課題として取り上げられていた「家庭や地域との連携」を強め、人間関係形成・社会形成能力を育成する必要がある。

2. 就労支援に関して

就労支援に関して、以下の様に整理する。

- ・視覚障害者の職種の広がりにはあまり感じられていない。「視覚障害者が就業できる職業は？」の問いに「三療業」（69.8%）が一番多かった。
- ・就労していく上で身につけておくべき力はコミュニケーション能力と考えられている。
- ・職業生活に考えられる課題や困難さとしては一番多く回答のあったものは、小学部、中学部は「障害に対する周囲の理解」普通科は「移動」「障害に対する周囲の理解」「職場での人間関係」専攻科は「移動」であった。

実際に視覚障害者の仕事は限定的であり、盲学校の教員にとっても視覚障害者がどのような仕事ができるかは明らかではなく、視覚障害児を持つ親も、本人も社会も知らない。このような状況の中で、キャリア教育がどのような意義を持つのか、何がどのように変わるのかを知らないままキャリア教育を行うという矛盾が生じていることが窺われた。

筆者は盲学校の評議員や評価委員などを続けているが、盲学校におけるキャリア教育は、主に専攻科の生徒だけを対象に行われ、年に一度先輩の鍼灸院や地域の鍼灸マッサージ関係の施設を訪問するのみである。

キャリア教育の研修報告会では、キャリア教育＝職業体験実習と認識されているような報告もみられる。

これからは、視覚障害者が最も多くの時間を過

ごす場所は学校や施設などではなく、職場である必要がある。

日本は、視覚障害児者に対する教育には力を入れ、成果を上げてきた。インクルーシブ教育の進んだ西ヨーロッパから見ると、日本の盲教育制度は遅れており、見えない者は盲学校へといったイクスクルーシブな面が批判されてきた。

ところがヨーロッパ諸国では普通の学校に通う視覚障害児が増えた結果、専門性を持った盲教育担当教師が育たない深刻な問題が起こっている。

日本は70校近い盲学校を全国に有しており、効率的で効果的な教育を行うことが可能なシステムになっており、専門性を持つ先生も存在している。

これからの日本の盲教育において必要なのはキャリア教育である。問題は模範となる実践例や教育方法が確立していないことである。

まず、取り組むことは、視覚障害者が実際のどのような仕事に従事しており、どのようにすれば、その職場で生き残れるかを分析することである。また、そのような分析を少なくとも盲学校の教員はいつでも参考にすることができ、盲学校の児童生徒も自由に利用できるようにならなければならない。

V 今後の課題

アメリカ AFB には CareerConnect⁵⁾ というシステムが存在している。

CareerConnect には、登山家、科学者、医者、弁護士、研究者など多くの分野の視覚障害者が登録され、なりたい仕事に既についている先輩として、アドバイスをを行う。

このサイトでは、最も重要な姿勢として、もし、生徒が運転手や野球選手になりたいと夢を述べた際、現実を悟らせるという観点で『無理』という発言は絶対禁物としている。その夢に近づくために教師と工夫を重ねることが重要としている。

日本の教育はどうだろうか。自己理解という形で、視覚障害者が就労をすることは難しいという現実を悟らせることに重きをおいてきたのではないだろうか。今回の調査で、全ての仕事に就労可能だと答えた教員は144人中19人、三療以外無理だと回答した教員は8名、無回答は12名いた。

CareerConnect の考えであれば、『できない仕事はない』『世の中にある仕事全て』+『ベンチャー』などの返事となるはずである。

今回の調査で得られた結果は、教員に問題があ

るのではなく、対策が遅れている教育行政に問題があると考えする。

盲教育の専門性は、経験を必要とするが、盲児童の減少で、盲学校の教員の専門性に陰りが見られる。具体的で、実施可能なキャリア教育システム構築が火急の問題である。

引用文献

- 1) 文部科学省 (2011)「高等学校キャリア教育の手引き」http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/career/1312816.htm
- 2) 中央教育審議会 (2011)「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」(答申)http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afielldfile/2011/02/01/1301878_1_1.pdf
- 3) 長尾博 (2015)「視覚特別支援学校の子どもたちに対する「将来なりたい職業」全国調査から見えてきたもの」宮城教育大学特別支援教育総合研究センター紀要 第10号
<http://nagao.miyakyo-u.ac.jp/shisaku/date/pdf.pdf>
- 4) 厚生労働省職業安定局雇用開発部障害者雇用対策課地域就労支援室「平成25年度障害者雇用実態調査結果」
<http://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-11704000-Shokugyouanteikyokukourei-shougaikoyoutaisakubu-shougaishakoyoutaisakuka/gaiyou.pdf>
- 5) AFB American Foundation for the Blind
<http://www.afb.org/info/living-with-vision-loss/for-job-seekers/12>

表1 アンケート調査内容

I プロフィールに関する質問
Q1 性別
女性・男性
Q2 年齢
20代・30代・40代・50代・60代
Q3 盲学校での勤務年数
1年未満・1年以上5年未満・5年以上10年未満・10年以上
Q4 所属学部
小学部・中学部・高等部普通科・高等部専攻科・その他
Q5 担当
就労支援担当・キャリア教育担当・その他
Q6 キャリア教育担当経験年数
1年未満・1年以上4年未満・4年以上10年未満・10年以上
II キャリア教育に関する質問
Q1 視覚特別支援学校（盲学校）における「キャリア教育」の重要性についてどのように考えられていますか？
①大変重要である ②重要である ③ある程度重要である ④少し重要である ⑤重要でない
Q2 児童生徒が自立や社会参加をしていくために、どの段階からキャリア教育を進めていく必要があると思われますか？
①幼稚園 ②小学部低学年 ③小学部中学年 ④小学部高学年 ⑤中学部 ⑥高等部
Q3 キャリア教育に関する指導内容について、特にどのような視点を重視して指導を行っていますか？（複数回答可）
①基本的生活習慣の定着 ②労働観・職業観の育成 ③他学部との系統性 ④児童生徒の主体性・積極性 ⑤人間関係形成・社会形成能力 ⑥自己理解・自己管理能力 ⑦生活上・学習上の自立的支援 ⑧キャリアプランニング能力 ⑨課題対応能力 ⑩保有する感覚を活用して事物をとらえる力 ⑪その他
Q4 キャリア教育の視点を生かした教育活動を充実させていく上で、どの教育課程との関係を特に重視していますか？（複数回答可）
①各教科 ②総合的な学習の時間 ③道徳科 ④自立活動 ⑤外国語活動 ⑥特別活動 ⑦理科 ⑧その他
Q5 児童生徒が「働くこと」や「自己の生き方」などについて考えていくことができるよう、どのような活動を通してその意欲や態度を育んでいきたいと考えられていますか？（複数回答可）
①係活動 ②給食・掃除当番 ③ボランティア活動 ④集団宿泊活動 ⑤職場体験 ⑥自然体験 ⑦学校行事 ⑧社会見学 ⑨各教科での体験的活動 ⑩その他
Q6 キャリア教育の視点が教育課程の中にどの程度反映されていると感じていますか？
①十分に反映 ②おおむね反映 ③どちらとも言えない ④あまり反映されていない ⑤全く反映されていない
Q7 視覚特別支援学校（盲学校）において、「キャリア教育」を実践していく上で、どのような課題や難しさがありますか？（複数回答可）
①教員間での共通理解 ②学部間での連携 ③家庭・地域との連携 ④教育課程の中での位置づけ ⑤キャリア教育に関する実践例（情報）の不足 ⑥組織体制の整備 ⑦専門性の確保 ⑧評価の方法 ⑨施設・設備 ⑩研修の充実 ⑪予算の確保 ⑫その他
Q8 キャリア教育の全体計画や年間指導計画について、どの程度活用できていると感じていますか？
①十分に活用 ②おおむね活用 ③どちらとも言えない ④あまり活用できていない ⑤計画を作成していない
Q9 今後、キャリア教育を通して、どのような能力や態度を児童生徒に身につけて欲しいと考えていますか？（自由記述）
III 就労に関する質問
Q1 視覚障害者の職種の広がりについて、どのように感じられていますか？
①大いに広がっている ②ある程度広がっている ③どちらとも言えない ④あまり広がっていない ⑤全く広がっていない
Q2 視覚に障害のある者の職業について、どのような職業があると考えますか？思いつくものをすべて書いて下さい。ない場合は「なし」と書いて下さい。（自由記述）
Q3 視覚障害者が就労していく上で、どのような力を身につけておく必要があると思われますか？（複数回答可）
①移動能力 ②コミュニケーション能力 ③仕事の遂行力 ④ビジネスマナー ⑤パソコンスキル ⑥情報活用能力 ⑦確かな学力 ⑧集中力 ⑨忍耐力 ⑩課題解決能力 ⑪その他
Q4 視覚障害者が職業生活を送っていく中で、どのような課題や困難さがあると思いますか（複数回答可）
①移動 ②情報保障 ③支援機器の確保 ④障害に対する周囲の理解 ⑤安全な環境設備 ⑥職場での人間関係 ⑦その他

